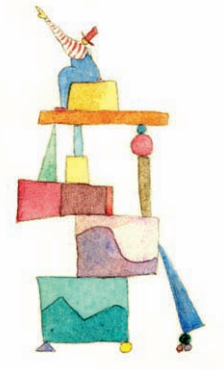
高知医療センター

PFIの参画によってホスピタリティの向上を図る





円形にペーブされた南側の庭越しに見る。右がくろしおホール、中央部正面がふれあいロビー、高層部が病棟。

病院の運営にＰＦＩを導入

400床の県立病院と410床の市立病院が、老朽化と狭隘化を理由に、整備充実計画を策定したのが始まりでした。建て替えを視野にいれた整備計画でしたが、いずれも総合的な病院であったため、県と市による検討委員会が組織され、21世紀の医療提供のあり方を見据えて導き出した結論は、ふたつの病院を統合整備する計画でした。

1998年11月に、この整備事業の主体となり統合新病院の開設者となる「高知県・高知市病院組合」が設立されました。同組合は99年３月には統合新病院の整備基本計画を策定し、翌2000年４月に、島根県立中央病院長として病院統合情報システムを稼動させるなど、患者さん中心の医療を実践していることで知られる瀬戸山元一さんを、院長予定者として組合理事に迎えました。

公募により「高知医療センター」と決まった新病院では、「患者さんが主人公の病院をめざして」という基本理念が掲げられ、これを達成するために、病院運営に民間企業の運営ノウハウを活用して、病院組合との協働によって病院経営を行なうという、ＰＦＩ方式が導入されたのです。

病院としては全国的に見ても初の試みで、地元紙は「高知版ＰＦＩ」と呼び、期待が膨らみました。

ＰＦＩを担当する企業として応募した４グループの中から、審査によって最終的に選ばれたオリックスグループがＳＰＣ（特別目的会社「高知医療ピーエフアイ株式会社」）を設立して、病院組合や設計者との協働に参画しました。

新築される病院の設計者選定は公開プロポーザル方式で行なわれ、数多くの応募案の中から審査の結果、全国的な規模を持つ佐藤総合計画と地元の西川設計とのジョイントベンチャーが設計者として選ばれており、SPCの設立時には実施設計がまとまっていました。

一方、オリックスグループは応募時に行なったさまざまな技術提案が評価されて選ばれたのですが、病院の建設プロセスでは実施設計完了という時期にあたり、新たな提案をどのように建築で実現するか、関係者全員の努力が傾注されることになります。

患者さんが主人公の病院とは

ホテルの運営に実績を持つオリックスの方針は、医療をサービス業としてとらえたものですが、実際にそれを一般的な病院施設で行なおうとすれば、具体的な機能とともに、さまざまなところに違いが出てきます。一般的に「ホテルみたい」という言葉には華やかさや豪華さといったイメージが重なります。一方、「病院みたい」という言葉からどのようなイメージが喚起されるでしょうか。これを変えるのが目的のひとつでもあります。

オリックスグループでこの事業の施設総括監理にあたったのは、オリックス・リアルエステート運営事業部の松田卓穂さん。以前、建設会社に勤務していた間に15の病院建設に携わった経験があり、その経験から経営者やドクターとともに、看護師さんたちから現場の意見を聞くことが大切だということを知っている人でした。

「患者さんが主人公の病院をめざして」という病院側が提示した基本理念に沿って、設計者は以下の６つの設計コンセプトをもって計画を進めてきました。

1　地域性、敷地環境を配慮した病院にします。
2　明るくわかりやすい病院にします。
3　患者さんに優しい病院とします。



ふれあいホールの見下ろし。高知市の中心部から車でほぼ20分の距離にあり、周辺には豊かな自然の風景が広がる。



くろしおホール内部。



くろしおホールの壁面は伝統的な手法で土佐漆喰が塗られ、窓のサッシには高知産のヒノキの集成材が用いられている。

4　患者さんの立場に立ったサービスが提供できる病院にします。
5　安全で安心できる病院にします。
6　経済性・効率性・将来性を考慮した病院にします。

これに加えて松田さんたちＳＰＣは患者さんサービス向上のために次の３点を実現したいと望んでいました。

1　ホスピタリティ豊かなエントランス・ロビーとしたい。
2　清潔感のあるきれいなトイレを提供したい。
3　おいしい食事を提供したい。

ＳＰＣの持っているノウハウを生かすべく、実施図面をもとにさまざまな検討が繰り返された結果、設計を変更したい項目の数は273にものぼりました。

とくにエントランス回りとトイレの計画は全面的に見直されるのですが、「皆さんの要望を実現するためには何とかしましょう」といって立ち上がったのが佐藤総合計画設計長の永井豊彦さんでした。基本設計が終わった段階からの構造躯体に関わるような大幅な変更はほぼ不可能といってもよいでしょう。限られたコストと時間の中でどこまで理想を実現できるか、大きな挑戦だったと思われます。

「病院」より「街」をイメージさせる空間づくり

正面エントランスから入るとコーヒーの香りが漂い、ピアノの音が流れてきて、ホテルのロビーかと見紛うほどに明るく開放的で気持ちのよい空間が広がっています。紗のように透明感がありながら空間を軽く仕切っているのは、高い天井から吊り下げられたステンレス製のスクリーン。「ふれあいロビー」と名づけられたこの空間では、クリスマスコンサートなどさまざまな演奏会が折々に開催されます。プロも出演しますが、ドクターのグループや友人たちによる演奏も披露されるなど、アクティビティの高い空間となっています。

取材に伺ったとき、ソファに腰掛けている患者さんの横で、病院のスタッフが膝をつきながら説明している姿が印象的で、ＳＰＣが掲げたひとつ目の目的は達せられているのを、目の当たりにすることができました。これまでは順番待ちをした後に薬局のカウンターの前に並んで薬を受け取るのが当たり前でした。ここでは、スタッフは患者さんと同じ目の高さで話すように教育されています。患者さんとスタッフとが、一緒になって病を癒そうとする姿勢が見えるようです。

１、２階は外来診療および管理部門を中心としたフロアで、病院機能に加えて、１階にはコンビニエンスストアやコーヒーショップ、２階には「くろしおホール」と名付けられたオーディトリアムがあります。このホールは医療関係の研究発表や研修などのためのスペースで、手術室からの実況映像をスクリーンで見ることもできます。また、演奏会や演劇などの娯楽的なものも上演しており、利用者も病院関係者や患者さんをはじめ、一般市民や県民まで幅広く活用されています。

くろしおホールホワイエのサッシには高知県産のヒノキの集成材が用いられ、壁面には伝統的な土佐漆喰が塗られるなど、地域の伝統や文化に対する配慮も行き届いています。

なお、診察室には最近オフィスでも話題を呼んでいるフリーアドレス制が採用されています。これは個人の席を限定せず、空いている場所で仕事をするシステムです。診察室内の構成は、特殊な診療科以外はほとんど同じで



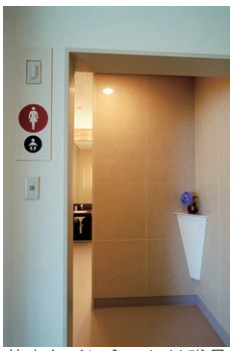
男子用外来トイレ。



仕様は男女とも同じで大便ブースの扉には円弧状に移動するスライディング方式を採用。また壁面の各所に、木炭を利用した防臭材をパンチングメタルでサンドイッチしたパネルが用いられている。



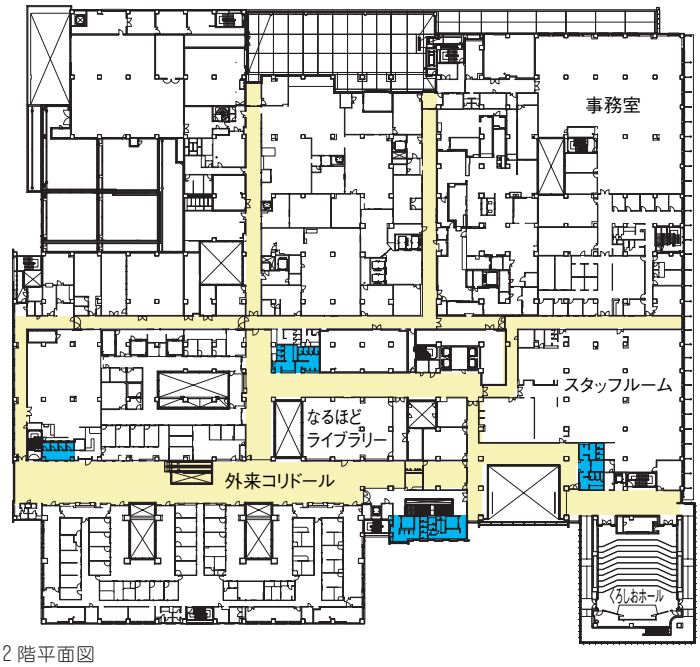
女性トイレにはパウダーコーナーが用意されている。



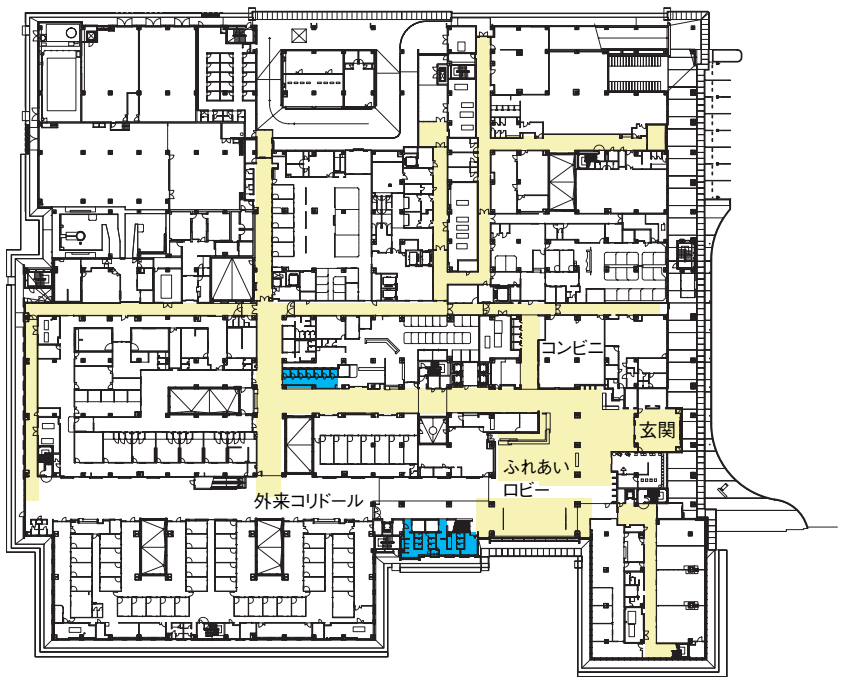
外来トイレ入口には職員の手によって生花が生けられている。



病棟基準階平面図



2 階平面図



1 階平面図



病室の手洗いコーナーにも、家庭の洗面室を思わせるデザインが用いられている。



外来用多目的トイレ。さまざまな場所に紙巻器が設置されている。



病棟は分散トイレに加えて、看護単位にひとつ集中型トイレが用意されており、女子トイレのブースにはベビーチェアが設置されている。



病棟の集中型トイレに用意されている多目的トイレの仕様は外来と同じで、多様な利用者と使われ方を想定して計画されている。

す。診療科によって診察室を固定せず、状況に合わせて診療科のゾーンを増減し、効率的な診察ができるように配慮された方法で、同時に将来の診療科の変更などにも対応できるフレキシブルな考え方です。

外来用トイレへの気配り

外来の患者さんたちのためのトイレには、子どもと女性を大切にという基本的な姿勢から、女性トイレにはパウダーコーナーが設けられるとともに、冷房も用意された快適なトイレとなっています。

多目的トイレは右勝手と左勝手があり、さらに一般便器に加えてオストメイト対応と身障者用便器とが別々に、それぞれ数ヵ所に分散して設けられています。さらにトイレ内には使用器具に応じて使いやすい位置にシングルの紙巻器が複数個配置されています。さまざまな症状の患者さんの具体的な使い方を想定した上で、それぞれに対応できるように配慮された結果です。

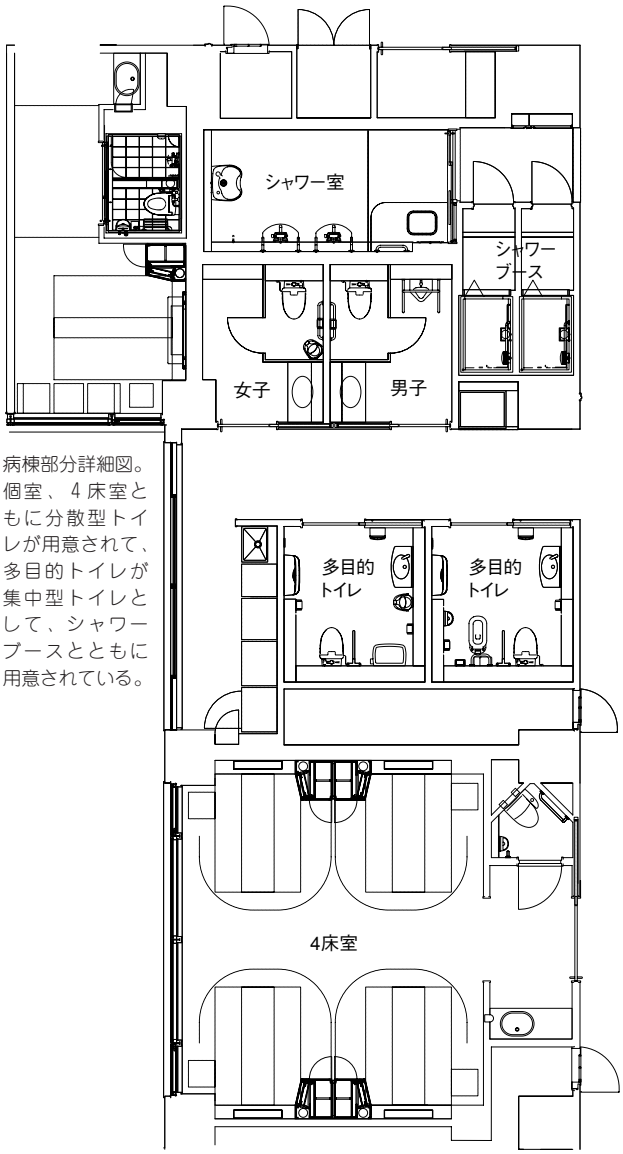
トイレの扉を外に開くか内側に開くかは、いつも問題になります。内部で倒れたときなどの内部救助の場合には外開きが有利です。しかし、外開きだと中から出るときに、外にいる人にぶつかる可能性があります。ここで採用されたのは円弧状の軌跡を描くスライディング式の扉です。また、スペース的に余裕がないところでは扉の中にもう１枚の扉が設けられて、非常時には内側の扉が外に開くようになっています。(P14の写真参照)

防臭対策としては木炭を原料とする板を松田さんが探し出し、それをパンチングメタルでサンドイッチしたパーティションを開発して利用しています。壁材に用いられたのは大理石風の表情を持つ、600mm角の大判セラミックタイルです。タイルを大判にすることによって目地を少なくし、汚れが溜まりやすい目地の量を減らしています。なお、清掃は外部への性能委託です。清掃回数を決めるのではなく、トイレをいつも清潔な状態に保つことに主眼を置いたもので、クレームがつかないように清掃・管理することが求められるものです。

入院患者の居住性向上に県民、市民も参加

病院の建設中に、１床室、４床室そして診察室のモデルルームが一般公開され、1,000人以上の県民や市民が訪れ、そこで行なったアンケートの結果が設計に反映されることになりました。アンケートに答えたのは10代から70代までの人びとで、約550もの意見が寄せられました。トイレに関する主なものは防音、防臭、そして夜間の使用時に光が病室に漏れ出さないことなどでした。

病棟は１フロアが２看護単位で構成され、１看護単位は48床。病室のトイレは分散型が基本で、１床室のトイ



病棟部分詳細図。個室、４床室ともに分散型トイレが用意されて、多目的トイレが集中型トイレとして、シャワーブースとともに用意されている。

レとも、すべてウォシュレットが装備されています。４床室のトイレの便器は軸線に対して45度振られています。そのため、便器に腰掛けたときに目の前に扉がくることなく、視線が対角線方向に向かい、狭いトイレでも広く感じられます。また、ギブスをはめているなど、脚を曲げられない場合でも、脚を前に伸ばしたまま入れる余裕が足元に生まれます。

扉は通路から引き込み、病室側に吊元を持ってくることにより、外開きでも外にいる人に当たる危険性を減じ、夜間の利用時にトイレ内の明かりが病室内に届かないようになっています。

これらとは別に、車いす対応とオストメイト対応、それに便器の右勝手と左勝手が組み合わされてふたつの多目的トイレが、さらに見舞い客用を兼ねて男女のトイレ各１が、１看護単位に用意されています。

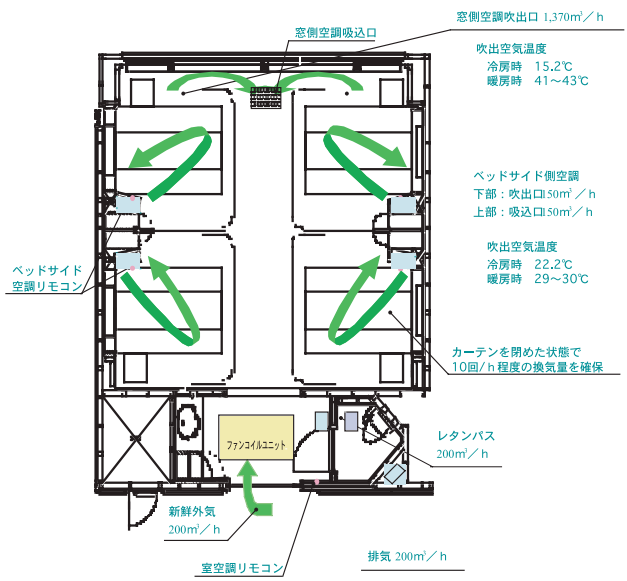
病室の居住性については、一般的なパイプのベッドではなく、家庭で使うようなアメニティのあるものを特注し、室内照明も間接照明が主体となっていて、柔らかな拡散光が落ち着いた雰囲気をつくり出しています。読書灯も無影灯のような効果を出す工夫がされています。反射板を組み込んだ上部間接照明と、左右にふたつの光源をもつ下部間接照明との組合せによって、患者さんはどのような姿勢でも影ができずに本を読むことができます。

多床室の場合、空調は一括して行なわれることが多いのですが、ここではベッド毎に調整できるような空調システムが導入されています。

ＳＰＣが拡大したＩＴの活用

ベッドサイドにはパソコン端末機能をもつ液晶モニターが設置されており、これがテレビの視聴やインターネット接続が可能なまでにスペックアップしたのはＳＰＣの提案のおかげです。この端末から前日の夕方までに予

４床室の空調方式
ベッドサイド下部から吹き出し、天井から吸い込む。
（資料提供　佐藤総合計画）





左の写真は採尿室のトイレ。遮音性を重視した関係でスライディング式の扉が採用できなかったため、内開きの扉に非常用の外開き扉をつけた二重扉となっている。右の写真は非常用の扉を開けた状態。

約すれば食事をオーダーすることもできます。

患者さんはオーダーとともにリストバンドに記入されたバーコードも入力します。オーダーの内容がその患者さんにとって相応しいかどうかは担当医が判断し、必要ならばアドバイスを与えます。患者さんを特定するためのバーコードですが、カルテや顔写真などとともにさまざまなデータが統合情報システムとして一元化され、患者さんの快適な医療生活と確実な医療を実現しています。

食事は病棟配膳システムが採用され、温かいものは暖かいうちに、冷たいものは冷たいうちに食べることができます。また、各病棟には管理栄養士がいて、患者さんひとりひとりについて食事内容や残食を確認しながら栄養状態をチェックして、コンピュータを利用して栄養管理をしています。

ベッドサイドの端末は各種診療情報の提供や、患者さんから病院に対するクレームなどにも利用されます。患者さんから寄せられたクレームと、それに対する具体的な対応方法もこの端末に公開されるため、病院内のコミュニケーションを高める結果となっているようです。

災害への対応

高知県は南海地震の発生が予想されています。高知医療センターは災害発生時にも病院機能が維持できるよう、免震構造となっています。また、外来ホールから１、２階の待合や廊下、診察室までが治療スペースとして機能するように、壁には医療用の配管が施されています。さらに、施設だけが無事でも医療活動はできません。同時に建設された３棟の職員宿舎にも免震構造は採用されています。

アメニティ

ロビーやくろしおホールの家具のセレクトや色彩計画、各所に置かれたアートなどが、病院全体に居心地のよい環境をつくり出しており、病院らしくない病院が実現しています。

そして、それ以上に、病院スタッフの患者さんに対する態度の中にホスピタリティが感じられて、ＳＰＣの役割が実感できる病院となっていました。

上記の新しい試みは、新しい病院建築のありかたを求めて、サービスという側面からさまざまに提案をし、それらを慎重に検討しながらたどり着いた結果です。これらが今後病院関係者そして患者さんたちによってどのように評価されるかが楽しみです。

なお、里帰り出産や小児科に入院している子どもの親たちを支援する「ドナルド・マクドナルド・ハウスこうち」が隣接敷地にできました。日本では３番目です。（ドナルド・マクドナルド・ハウスの詳細についてはVol.4「宮城県立こども病院」をご参照ください）

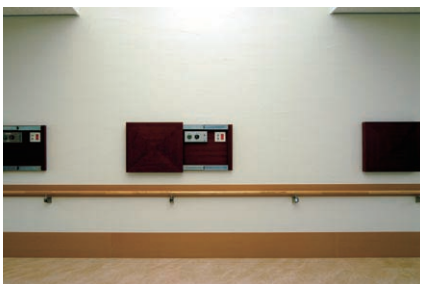




ベッドサイドの端末からオーダーした食事は、ラウンジに設けられたパントリー（写真右側）で配膳されるので、できたての美味しさが楽しめる。

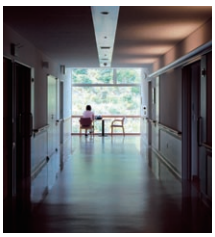


病棟の要ともなるスタッフステーションはフロアの中心部に集約され、看護業務の連携を図っている。



外来コリドールの名称をもつスペースは、災害発生時には診察室や廊下とともに治療スペースとして使えるように、壁面には医療用の配管が隠されている。





廊下の先端に設けられた「だんらんラウンジ」で憩いのひと時を過ごす患者さん。窓の外には自然の緑が広がる。